前芝武史（まえしばたけし） 文化表現系教育コース［芸術系教育分野（美術）］・小学校教員養成特別コース准教授

共同研究者

初田隆（はつだたかし） 文化表現系教育コース［芸術系教育分野（美術）］・小学校教員養成特別コース教授

浅海真弓（あさうみまゆみ） 文化表現系教育コース［芸術系教育分野（美術）］准教授

このページでは日本学術振興会の科学研究費助成事業で採択された研究を紹介します。同助成事業は、全ての分野の「学術研究」を格段に発展させることを目的に、独創的・先駆的な研究に対して助成を行うものです。基盤研究、挑戦的萌芽研究、若手研究などに分かれており、挑戦的萌芽研究は1人または複数の研究者が共同で行う芽生え期の研究が対象。研究期間は3〜5年です。

教育学部美術科における領域横断的授業「具象表現」の構想 ―絵画・彫塑領域から―

（平成23〜25年度科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究に採択）

現代の美術は驚くべき多様化を極め、それに伴い美術教育も次々と変化しています。そんな中、造形力重視の考えは後退、昨今では造形を苦手とする子どもが増加し、美術とは何か、図工・美術とはどんな教科かという議論が増えてきました。

本研究では古来、絵画・彫塑をまたぐ「具象的表現」をテーマとした授業科目を構想することで、その内容・教育的意義、基礎事項等を見いだしたいと考え、次の約20時間のモデル授業の構想、実践、検証を行いました。

①トレーニング―塊の構築―
②トレーニング―把握―
③記憶と再現
④都市を作る・描く
⑤人体の美と構造
⑥講義「具象」
⑦絵画・彫塑―具象実技―

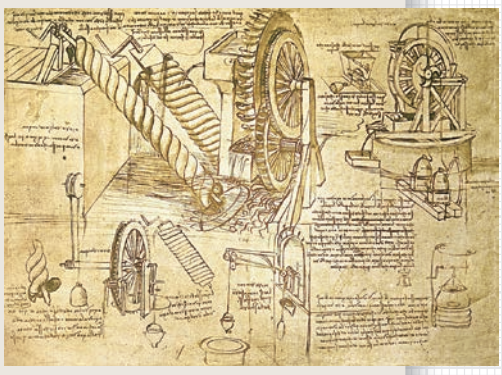
①では彫刻もデッサンも本質は塊の構築にあるという表裏性に着目、紙面デッサンから彫刻へ、またその逆へと、この本質が往還的に学べるようにしました。②では物体の寸法、位置、方向、断面の形状把握等の能力向上のトレーニングを考案。③では描写・再現と記憶の関わりをテーマとしました。④では彫塑の姉妹たる建築や環境デザインの初歩学習を含ませた討議を交え、塊を操作して箱庭で都市を構想させ、その内容をデッサンさせました。⑤では人体の骨格標本と粘土での美術解剖学の授業を考案。⑥では諸芸術の比較、歴史的変遷や多様性、人間の成長や現代の教育的課題等と照合した講義を各領域から行いました。⑦では人物モデルを用い、絵画と彫塑の相互補完性に着目、双方の制作に取り組ませました。

↑「⑤人体の美と構造」では、粘土を使って人体の解剖学を演習しました

↑「④都市を作る・描く」では、いずれの取り組みも平面・立体の造形を往還させました

具象やデッサンは技術よりも、ものの見方、考え方を学ぶことです。万物の仕組みを見て、作品設計を考え、自由や可能性を見る一方、秩序や原理・法則を知る必要があります。巨視／微視的に見たり、多面的に見たり、時に視点を変えるほか、構造／体系／関係で事象や作品を考えます。また、客観と主観・直観を往還整理し、事象を深く感取（感性）し、空間芸術たる本質に精通（悟性）し、どう感じさせるか思考工夫を凝らし、ああなればこうなる、こうすればああなると造形的に操作・思考（理性）し、課題解決への妥当性のあるスムーズな道筋を多角的に考えます。

さらに古今東西を知り、常に自他を客観し、そして諸科学、あるいは全人的人間形成との蜜月同化を図り、一層の展開を得るというものです。本研究を通し、当領域の内容学的な基礎体系や基本事項、教育的価値・位置付け等が一層明確になりました。



←↑ダ・ヴィンチの素描には構造と設計がうかがえます